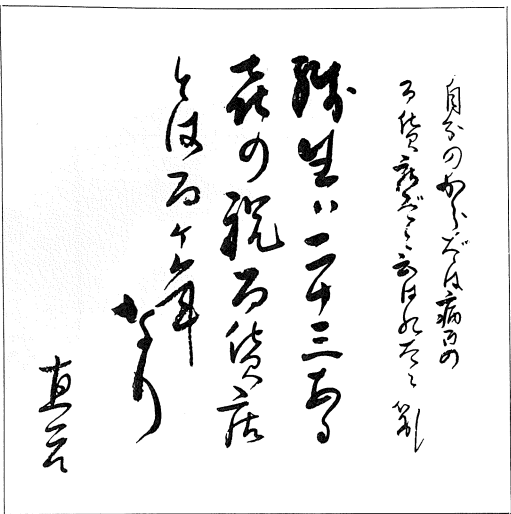


# 金子さんの話

森本準一



自分のからだは病気の百貨店と言われたに對し

残生は二十三ある

喜の祝百貨店

とは百ヶ年なり

直吉

動もせず、お酒を飲んで遊ばれるようなこともなかった。どうして心気転換をされますかと尋ねたところ、それは愉快な夢を見ることだと言われた。

「今度はかくかくの仕事を始めよう。始めてみると大変うまくいって立ち処に五十万、百万両と儲かった。更に百万両を投資して新しい仕事を起こす。これも非常に順調に運んで四百万、五百万両の利益が出た。また、これを投資して新しい仕事をふやす。すると僅か間に千万両儲かった。愉快で愉快でたまらなくなつて飛び上がった。目が覚めた。大塚君が側に居て百万両の借入れはまだ話ができませんと言うので、アラッいま儲けたのは夢だったのかと気がつく。

まあ、そんなふうには愉快な夢を見ることが一番私の心気転換になる」

その三、約束の実行が遅れた話  
ある年のお正月「たからや」で豚の角煮のご馳走になった。

そのとき、ある年増の芸者が出て挨拶をしたあと「金子さん、あのお約束はどうなりましたか、もう十年にもなるではありませんか」

金子さん曰く「イヤあれは忘れてはおらぬ。永年、大変お世話になつ

たので帯だけでは気が済まぬから、羽織も一緒に揃えておもうている。帯と羽織ということになれば、ついでにタンスも思って桐の木を植えておいた。もう少し経てばタンスになると思つて喜んでおったところ、先年、大風が吹いて真ん中から折れた。それで代わりに新しい桐を植えておいた。永いことはかからぬから、その木が大きくなるまで暫く待つてくれ」

芸者が「羽織もタンスも要らないから帯だけ早く整えて頂戴」とせがんだ。

「それではワシの気が済まぬ。永いことはかからぬから是非それまで辛抱して待つてくれ」ということで食事が終わった。

寓意があつて話されたものではないが、当時の金子さんの心情の一端が覗かれるようである。

## 原稿募集

内容 随想、詩、和歌、俳句、

絵画、写真など

用紙 原稿用紙四百字詰め四枚程度

締切り 昭和四十三年五月末日

送り先 神戸市生田区三宮町一丁目

三神ビル五階  
太陽鋳工KK分室  
「たつみ」編集部宛

私は金子さんと安東君とに連れられてよく食事に出た。昼は向い側の中華料理、夜は県庁裏の「たからや」に行くことが多かった。食事中、話上手の金子さんからいろいろ面白い世間話や冗談をよく聞いたものである。今、その冗談話を二つ三つ書いてみましょう。

### その一、大食のこと

金子さんは老境にはいつても仲々の大食家であった。

「私の若い頃、神戸に大食会というのがあった。ある日大きなスズキのご馳走が出た。自分は大きな奴を二つペロリと喰った。皆ビックリしておつたが口の悪いのが一人居て、金子さんがスズキの二つや三つたいらげるのは何んでもないよ」と言ひよつた」

### その二、心気転換の方法

金子さんは随分多忙で心労の多いお人であったが、別にこれという運

## 放談

浅田長平



筆者肖像画 小磯良平氏描く

ご指名戴きまして誠に僣越でございますが、私の最近の所感を申し述べたいと思ひます。一昨年の一月中、ありましたか二月でありましたか、私が「日本の国は土木建築のほうに非常に遅れておる。まず例えば道路のごときものは東海道のごときもの、江戸時代に大名行列をしたままの状態ですむくれの道である。その他、水道とい住宅とい、あらゆる公共事業が一番遅れておるから大いに公債を發行して、それをやっ

てもらいたい。それは最も必要であ

る」ことをば申したんであります。そうすると、それから二、三日後のテレビで田中角蔵大蔵大臣は「公債のごときものを發行する意は毛頭ない」ということとあります。続いて佐藤総理大臣も「政府は公債を發行する意はない」ということを言うてましたので、私はどうも現在の政治家という人も先の見えな連中が多いかと思つておつたんですが、ところがやはり必要というものは一番強いのでありまして、必要の前には勝てない政府は、去年の下期から公債を發行し、今日では盛んに公債發行をしております。

ご承知の明治維新というのは今から百年前ですが、そのときには天朝軍、すなわち天皇陛下のほうの軍には薩長がついておりますが、天朝方というのは殆んどお金があり

ません。ただ錦の御旗一つと太政官紙幣という奴を無限に出して、錦の御旗を振り回して日本の国をば一大革命をやつたわけでありまして。何百人という当時の侍の二本の刀を取りあげてしまつて、いっぺんに失業させた。それで太政官紙幣という奴でもつてきた。結局、いわゆる現ナマなんでもものは要らない。そういう具合であります。国が変わるときとか或いは革命が行なわれておる変革のときには、必ずそういう公債か社債か、或いは今の太政官紙幣というものが出るべきものであります。現在、日本の国に会社がたくさんござ

います。大きな会社は八幡製鉄はじめ或いは東京電力とかたくさんあります。どの会社も平均して自己資本は二割、今現在では平均して自己資本は一分八分と聞いておりますが、斯くの如き変革期には、大体において借入金でもつて仕事しておるのであります。

また、お金の値打ちは上がったのか下がったのか知りませんが、われわれの鈴木商店は昭和二年の四月三日の神武天皇祭のときに、まいったんであります。そのとき間なしに十五銀行という一番大きな銀行もつぶされました。現在なれば絶対につ

ぶしておらんとおもう。

鈴木商店もつぶれておらんし、十五銀行もつぶれておらんし。ご承知の山一証券のような株屋でさえも今はつぶさない。株屋というふうなもの、言わばバクチを打つ所なんです。いわゆるスペクレーション。スペクレーションの親玉の山一証券でさえもつぶさないというの、今は借金が手を振って歩く時代になっておる。時代が変わつたんであります。私は今日以後一体どうなるかということに対して、これは私の妄想かも知れませんが、昭和四十二年（一九六七年）これから私は第三産業革命はいつて行く時代であると思つております。それで世界はどうなるかということをおししますと、世界はまず三つになる。アメリカ、ソビエト、日本。産業国としてなぜに日本というものを、そういう具合に私は高く評価するかと云いますと、北海道から九州まで一億の人口が、日本語一つで通用するところの大和民族でかたまつております。そしてこの一億の人間が非常に勤勉であります。非常にクレバーであります。世界中のどの国に比べましても、ジャパニーズは非常にクレバーで、インテリジェントで、ディリジ